

令和 6 年度 第 1 回 教育課程編成委員会議事録

日時：令和 6 年 9 月 27 日（金）20：00～20：50

1. 出席者紹介

教育課程編成委員会 5 名：長尾 博，松本逸郎，小林小夜子，有福浩二、大坪 建

本校職員 6 名：淡野，韋，林，牧山，荒木，山内

2. 校長挨拶

（淡野校長）入試状況報告。総合型選抜入試を行い、理学療法学科 2 名、作業療法学科 4 名の出願があり、全員合格。

オープンキャンパスの状況報告。現在までの参加者で理学療法学科希望者が 45 名ほど、作業療法学科希望者が 24 名ほど、どちらでもない者が数名いる状況。

最近の傾向として、高校 2 年生までが勝負であり、3 年生になったときには進路をほぼ決めている状況。就職のため進学しない学生が以前より増えている傾向もある。長崎リハビリテーション病院と附属病院並みの契約を結んだため、オープンキャンパスを現場で行うという企画も検討している。

3. 前回会議後の報告

（林）本校の臨床実習に対する取り組みという形で報告をさせていただく。

取り組みの一つとして、1 年次、2 年次、3 年次のそれぞれの実習において説明会を実施している。

学生に対する実習オリエンテーションについても工夫している。これまでは教員による説明を聞かせる形であったが、今年度からグループワークを導入し、実習に対する心構えや身だしなみについて、学生に考えさせ発表する形をとるようにしている。

4. 開会

（韋）当委員会の第 6 条の規定により出席数を満たしているため、本委員会は適切に成立していることを報告。

5. 委員長選出

（韋）委員長は淡野校長で進めさせていただく。

6. 審議事項

1) 本校における新カリキュラム（令和 7 年度）について

（林）会議資料に沿って説明と報告。

- ・いくつかの科目の名称を変更した。

- ・ホームページに記載しているカリキュラムツリーを一部変更した。

2) 「スキルアップデイ」実施の経過報告について

（林）会議資料に沿って説明と報告。

- ・今年度は時間割に組み込んで計画的に実施したため、グループ学習の習慣化ができた。

- ・学習に対するネガティブな要素を緩和させる効果があった。
- ・テキスト解析から、教員や仲間と学習すると理解が得られやすいという傾向がみられた。
- ・インプット、アウトプットすることの効果を学生自身が感じている傾向がみられた。

3) 意見交換

(松本) テキスト解析の円が大きいとはどういう意味か？

(林) 円が大きいのは、学生のコメントに書いている言葉の多さを表しており、円の小ささは、言葉の少なさを表している。

(松本) スキルアップによる感想だと思うが、テキスト解析の円が大きくなるということは、学生がいろいろな受け止め方をしたということを示しているのか？

(林) 例えば、スキルアップに参加して、わからないことがわかるようになったという言葉に記載した学生の人数が増えると円が大きくなる。文章から「わかる」というキーワードを抽出して関連性をつなげていく解析法である。

(松本) どういう意味があるのか？

(林) 学生のコメントに入っているキーワードがこれだけあったということを円の大きさで知ることができる。

(松本) 取り組みに対する関心と効果が上がったという考えでいいか？

(林) そういう風に捉えている。今年は定期試験で良い効果が出たと思っている。

去年の1年生と比較して、今年の1年生の傾向としては、作業療法学科の学生はいきなり2極化している傾向がみられる。極端に学力が低い学生は少ないように思われる。理学療法学科も同じような傾向で極端に学力が低い学生は少ない傾向だが、2極化はしておらず、まばらにそれぞれの集団があるので、その点について私たちの課題であると感じている。

2026年以降に指定規則改定が予想されるため、その中のキーワードとして「多職種連携」「情報リテラシー」「就労支援」「公衆衛生」があげられているため、情報収集をしながら対応できるように準備をしていきたい。

(松本) スキルアップのアンケートは学生全員に取るのか？

(林) その通りである。

(松本) 本当に僕らが知りたいのは、アンケートを答えた学生たちの試験の点数がどれくらいになったのかを知りたい。試験問題を難しくはしておらず、問題の難易度は下げているが成績はよくない。

(林) 確かに問題の難易度は下がってきているが、不合格者は増えている。

(松本) そこが個人的な悩みであり、教員も同じではないか。しかし、貴校の制度では1年生の単位をすべて取得していなくても、2年生になれるという制度があるが、私はいいと思う。それがあつたため試験問題を易しくしなかった。何度も試験を行うより、難易度を下げて合格する方がいいのではないかと、今年は難易度を下げた。再試験をしたときに、スキルアップの効果があつたのかわからないが、今までになく高得点を取った学生が増えていたことが今年は新鮮であつた。

(林) 学生が頑張っているというよりも教員が手取り足取りという部分が増えての結果ではないかと

思う。丸々2日間、朝から夕方まで教員がつきっきりで定期試験の振り返りに取り組んだ。

(有福) 内容としては全科目を取り入れて行うのか？特定の科目だけを行うのか？

(林) 前期始まって間もないころから始めるが、中間テストが行われる解剖学の骨を覚えるグループワークから行っている。後半からは学生が苦手としている生理学を行っている。

(長尾) 今後も時間割に組み込むのか？

(林) その通りである。

(長尾) 分析の結果について、最初にスキルアップでどういう結果が出たらいいかという評価項目を最初に作っておいてそれに対して結果がよかったというのであればわかるが、これが実際どうなのかという感じがした。

フリートークの分析の仕方は心理学でもある。今回の分析はただ言葉が出たというだけなので評価するには単純すぎるのではないか。

最も大きな印象として、1年生前期定期試験の年度間の比較である。PTの場合はさほど差がない印象であるが、OTの場合は成績が変化しているという感じがしたので、コースの違いで変化があるのかという感じがした。

(林) 専門的な勉強に入ったことによって変化が起きているのか、その点については細かく見る必要がある。

(長尾) 何年間かやって、大きい目で見たら明らかにこの時期から変化というのがわかるのではないか。

(小林) スキルアップに参加してよかったということでデータを作られているが、PTとOTを合算したものになるか？

(林) その通りである。

(小林) スキルアップに参加してよかったというデータもPTとOTの2つに分けると、長尾先生が言われたような解釈ができるのではないかと思う。

(松本) 理学療法学科の学生は、障害の理解が比較的容易であるのに対し、作業療法の学生は現代の多様な事情や人間理解を深く考慮する必要があるので、2年生になったときに高次機能への理解が進むことで、学生の成長が加速する可能性があるのではないかという気がする。

(林) 進級によって主体的になる学生が増えている一方で、逆に意欲が低下する学生もいるのも事実である。この変化の要因は明確ではないが、専門的な学びが学生の姿勢や行動に何らかの影響を与えていると感じている。

(韋) 最初は手探りだったが、慣れることで安定感が増し、学生との関わりも改善されていると感じる。このような進展により、教育の効果も向上しているという印象を持っている。

(山内) 集団で学ぶことが自然になり、諦める学生が減少した印象がある。再試験を受ける学生の数是不変なもの、点数の落ち方が改善されており、もう少し頑張れば合格できそうな学生が増えていると感じる。このような変化は、スキルアップによる学習の影響であると考える。

(長尾) スキルアップの効果を評価する基準を明確に設定する必要がある。具体的には、人間関係の改善、理解の向上、動機付けの3つのカテゴリーの基準を設けることで、何が向上したかが明確になり、成績との相関も見えやすくなると考えられる。

7. 総評

(淡野校長) 学力についていけない学生がいることを認識し、国家試験を合格させるためには、学習習慣や単位取得に課題がある。過去の経験から、救済策を講じても国家試験で苦しむ学生がいるため、方向転換が必要な学生を見極めることも重要。また、解剖学や生理学などの基礎科目を重視し、国家試験の重要な分野に焦点を当てた教育を続けていくべきだと考えている。

8. 閉会

次回令和7年3月28日(金)

9. 謝辞